

令和七年冬号（2025年）

A photograph of a snowy forest path, with a central text overlay. The path is covered in snow and leads through a forest of trees heavily laden with snow. The text is written in a traditional Japanese calligraphic style.

あたらしい道

第545号

【里の仙人】

必ずね、みたまさんをもととして、

皆んなさん、

ご自分で行動なさればいいんですよって、  
分りましたね

平凡な人であつて下さいよ

そうして見たま即見たまそのものに

成る筈がんですって成っちゃうん

ですって

# あたらしい道

令和七年 冬 545号

## 目次

テーマ「里の仙人」

ことのは 里の仙人（普通の人であつてみたまそのもの）……………1

ご垂示（抄） 《紫の間・松の間のお示し》……………3

日本の国柄 古事記と日本文化……………  
編 集 部……………13

おもい

もつたいないの生活様式 — 福井 酒井 典康 …… 25

三月下座奉仕を終えて — 東京 大澤 好之 …… 28

おやかたさまの思い出 — 兵庫 畑尾 万里子 …… 33

日本の人柄

伊藤仁斎 — 東京 泉崎 博明 …… 36

この道とおる

大切なお客様と有難いお客様 — 東京 関塚 禎人 …… 45

大和撫子

たづぬる人の ことの音か — 神奈川 芹澤 和彦 …… 48

編集後記 …… 56

(表紙題字 松本草垣女史御親筆 とびら書 松下賀奈子さん)



---

期日：令和7年9月28日（日）

---

あたらしい道本部委員会



式典会場



式辞



総合司会



「日本、日本」 唱和



壮年部 あいさつ



開会の言葉



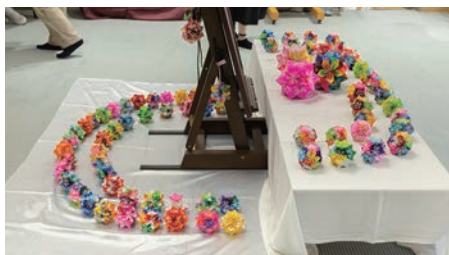
日本の歌 合唱



閉会の言葉



祝い太鼓



草垣亭



松木草垣記念館

## 物産展



## 直会





ことのは

## 「里の仙人」

(普通の人であつてみたまそのもの)

### 里の仙人だから中々

で、私はね、昔ね、もう二十年程前、こう申しました。

山の仙人になるのはいと易いんです。よろしいか、この道は、それとは違  
うんですからね、里の仙人になるのは、これ中々なんですからね。  
で、それがこの道だと申しました。

### 平々凡々にして

それでね、山の仙人になるのはいと易い。もう総てをあきらめてね

もう本当に変人になっちゃって、山へ入っちゃうでしょう。

ですから、「山の仙人いと易い」っていうんですね。

そうすると、この道は「山じゃない、里やで」って、こう言うんです。

「平々凡々、平凡であって、何も聖人君子をつくる所と違いますよ」って云ったことがあるでしょう、ねえ。ですから、普通の方であって、この道の理を身の内にたらふくよばれる（沢山戴く）んでございますからね、「俺エライ」とか、天狗になったんではとんでもございませぬよ。分かりましたね。

そこがお行なんですね。

「ハイハイく〜で〜いつくばって、ハイハイく〜で這い上がる」これがこの道なんです。

「ご垂示」(抄)

里の仙人

《紫の間・松の間のお示し》

《紫の間のお示しより》

### この道は里の修行

——比叡山延暦寺の僧が、十二年間の篁山行を終わって(昭和になって三人目)下山したという新聞記事が夕刊に載った——

それはね、山のお行ですわね。この道はね、里の修行でございますわね。山の修行でしたら、もう、一遍肚を決めてしましましてね、人里離れてしまつて、一方に偏したお行でございます。

そりやね、十二年間大抵(な事)じゃございませぬ。

でも「ようし」と思い決めてしまつたら何でもありませんわね。でも、偏してしまつてますわね。

この道は、山の行じゃない。里でのお行やでな。これがね、ついフト皆んなこんがらかっちゃうんですネ。

## 自分をしごいてこそ一人前

自分のお守り位自分でいいやとこう申しますわね。

(すると) 皆さんは私に「どうぞお願いします」

と仰いますけど、私がお守りするのと違いますよ。自分で自分のお守りしなさいよ。

私初めの頃はね、まだ俊徳道時代、阿倍野の最初の頃はね、手前がお守りをしてあげました。けれどもですね、もう十年以上はね、皆んな自分で自分のことをね、

「ああ、そうだ〜」とお守りするんですよ。

それがね、こう何かね、お手を引いてもらうような気持ちね、それじゃアカンで……

里のお行でございますからね、人としていい〜徳を戴くんでございますからね。で、山へ行っちゃったら、一方に偏しちゃうんですから、お付き合いにくうございますよ。

それではね、ある時はいいけど……

「ああ、無理だ〜、そんなこと言っても無理ですよ」

とこういう風にお思になる方が沢山いらっしゃる。私はよく分かっております。

でもね こういう時代でしょう それはね、何とか一つ自分をね、ギユツとしごかなきやなりませんよ。自分で自分をキユツくくくといじめるんですわね。これが中々、並や大抵でございませぬ。でもそれをしなかつたら、一人前のお方にはなり得ませぬのよ。

“ながら”でみたまになるのが理

私、最初の頃ね、「山に入るのはいと易い。里におくので、これが中々難儀やで」

とこういう風に言われて、私、その意味分からなかつたんですけどね、山の修行なら楽なもんや、肚決めたら何でもないんだけどな、相変わらず里におくんやでな。

中々、相変わらずにですわね、ながらくですからね、商売しながら、お勤めしながら、何々しながら自分をやり替えて、みたまくくく、みたまになり切るといふことは、こりや大抵(な事)じゃない。

でも、これが本当のく言うに言えない理じゃで、とこう云いますね。

### いずれ自分を拝むようになる

「やっぱり良かったな」といずれお分かりになります。その時に、自分を拝むんですよ。自分あの時は良かったな。その時に自分を拝むようになるはずですよ……

これがね、この道の理はちよつとよそと違いますのよ。

### 普通人でみたまになる

里の仙人、とこう申します。山の仙人なんかそんなもの、何でもなくて。そう思いますね。里のお行が中々なんじやとこう言うんですね。

相変わらずの、普通の普通人でなきやなりませんからね。

ここがく並や大抵ではない。それで、みたま通りになるんですからね。

### 自然の教えが山程ある

路傍の石にも、草にも、教えられる事がいっぱいありますわね……。それを、この道では「自然は、どう教えているだろう。自然によつて教え

られる事だらけだぞ」と、こう申しますんですよ。

それをね、知らん顔して放っておくから……それでは、とんでもございませんよ。見るにつけ、聞くにつけ「ああ、そうだく」

とにかく、手前が申さずともね、色んな事で我自ら悟らなければご損ですよ。

自然によって見せつけられる。その教えが山程あるんですよ。

《松の間のお示しより》

山の仙人では他人ひとに成り得ん

「里の仙人」ってこと、これまた繰り返しますけれども、山に閉じ籠っちゃったんなら、いと易いって云うんです。

もう覚悟決めちゃってね、そして、変わり者ですな、変わり者でお行すれば、そりやもう、なかく、何でもかんでもズケくと云ってね、ズバリくと、もう言えるような人になるでしょう。ですけれど、それじゃ、風変り、

変り者ですからね……

それじゃね、こういう時代にですね、

人に成るといふこと、凡そ不可能でしょう。

### 里のお行

それでは、あたらしい道の、本当のお助け人とはなり得ませんのよ、それで、「練つてく〜練り申して、あのお方のお徳、このお方のお徳を戴け」こう云っています。

それが里なんですね。里のお行なんでございます……

世間の色んな方に揉まれて、そして、節目正しくですね、そして窮屈な人に成らないで、まあそこをね、いい塩梅に持ちこたえて行くんですね。そのお行が、並や大抵ではないんですね。

### 自分助かって人さんを

自分助かって、それで、お他人さんを、どんどんく〜、これからお助けになれるでしょう。抱っこできるでしょう。

## 里の仙人でありや

私はね、昔ね、「山の仙人になるのは、いと易し、里の仙人になるのは、これが並や大抵ではない」っていうことを、聞かされましたね。

その「山の仙人」って云いますのはね、一寸変わってますね。ただ病気を治すとか、色んな方角を云うとか、一寸こう、抜け出たところがあったね。威張ってね、まア大将になってしまえるんだそうです……

そういう山の仙人は、一杯あるんです。

でね、この道になったからにはですよ、やっぱり誰から見られても、平凡な人であってね、変人だとか何だとかでは、何にもならないんですよ。幾らいいこと云っても、何にもならないんですよ。

## 正々堂々と世間へのし出す

里のお人、相変わらず平凡な人、それで、みたま通りになった方です。手前がね、「この方こういう人なんです、こういう人なんです」って云って、のしつけてね、シャーツと世間へ差し出すんですよ、ね。

まア譬えて云えば、そういうところなんです。

## 自分建て替えてこそ世間に

段々私に似てくるんですからね、よろしいか……

ご自分のしにくい癖が、一寸でもおありになったら、それをね、やっぱり多少でも自分に言い聞かせてね、多少は苦でしようけれども、それを面白くね、自分を建替えるということが、最も肝心でございまして。

そうしてじゃないと、お知り合いなんかには仰っても、こりややっぱり、通じませんからねって、ね。

## 末生の理を戴く

これが皆さん方のお子さんや、孫さんの代に、響くんですよ。影響するんですよって、ね。こういうことですわね。

## 山の仙人では

山の仙人では人は抱けない……

里の仙人、それはあたらしい道丈なんですよ。

### 普通の人であってみたまそのものに

平凡な人であってですよ、そうしてみたま即、みたまそのものに成る筈なんですって、成っちゃうんですって。

### みたまさんをもととして行動を

必ずね、みたまさんをもととして、皆んなさん、ご自分で行動なさればいいんですよって、分かりましたね……

〳〵何でもやかたに聞いてみよう〳〵 というそういう様なお気持ちをもうお出しになる必要ないんです。

ご自分に聞いたらいんです。

もう大丈夫、皆んなさん、分かりましたね。



絵 「札幌の街」 愛知 高橋佳孝さん作

日本の国柄

# 古事記と日本文化

編集部

## 一・古事記とは

古事記とは、どんな本？

古事記は、日本の神話を含む歴史書で、現存する日本最古の書物です。

和銅五年（七一二年）に、天武天皇が命じておのやすまろ太安万侶により編纂されました。上中下の三巻から成っています。

後世では日本書記とともに「記紀」と並び称されますが、日本書記は国外向け、古事記は国内向けと言われています。

古事記は、日本書紀のような勅撰の正史では

ありません。しかし、古事記の序文で天武天皇が経緯を詔されています。

天武天皇の古事記序文（訓読み文）

「帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、

いつは偽りを削り実を定めて、

のちのよ後葉に流へむと欲ふ」

個々の家を持つ『帝紀』と『本辞』が正実を失い多く虚偽があることを憂慮された天武天皇が、正しい言い伝えを後世に残そうと作られたと言われています。

つまり、諸家が持つ歴史観の統一を目指し、一つの物語にまとめたものです。

(史料の上では、序文に書かれた成立過程や皇室の関与に不明な点や矛盾点が多いとする見解もあります)

**どんなことが書かれている？**

古事記の原本は現存しません。いくつかの写本だけが伝わっています。

内容は、神代の時代における「天地の始まり」から「推古天皇の時代」に至るまでの数々の出来事が、神話や伝説などを含めて、紀伝体で書かれています。

『國學院大學「古典文化学事業」』のホームページによりますと、古事記は、「個々の神話や歌謡が一貫した文脈をなすよう配列されており、その緊密な構成は一個の文芸作品と呼んでも差

し支えないほど」であると、紹介しています。

また、和歌の母体となった古代歌謡(記紀歌謡)や、民間伝承の歌謡、伝説などの素材が含まれており、日本文学の源流を探る上でも、大切な宝の山となっています。

古事記は歴史書ですが、同時に文学的な価値も高く、神話を伝える書物として、神道を中心とする日本の宗教文化や精神文化にも大きな影響を与えています。

また、根も葉もない話ではなく、実際の史実に即している箇所が多くあります。

**編纂はどのようにして？**

『白村江の戦』(六六三年)で、唐・新羅の連合軍に大敗したあと、近隣勢力の脅威に対し、日本は国として歴史書を整備する必要が生じました。

六七二年の壬申の乱後、天智天皇の弟君である天武天皇が即位されて、『天皇記』や焼けて欠けてしまった『国記』に代わる国史の編纂を命じました。

その際、二十八歳で高い識字能力と記憶力を持つ稗田阿礼ひえだのあれに、『帝紀』及び『本辞ほんじ』などの文献を「誦習」させました。

その後、七一年の元明天皇の命を受け、阿礼の「誦習」する『帝皇日継』（天皇の系譜）と『先代旧辞』（古い伝承）を太安万侶が編纂し、七二二年に『古事記』を完成させたといえます。成立の経緯を記す『古事記』の「序」では、天武天皇の命で稗田阿礼が「誦習」していた上述の『帝皇日継』と『先代旧辞』を太安万侶が書き記し、編纂した、とあります。

（「誦習」は、単に「暗誦」することと考えられていましたが、「文字資料の読み方に習熟す

る行為」であつたとする説もあります）

### 『帝紀』と『旧辞』とは？

古事記は、『帝紀』に相当する部分と『旧辞』に相当する部分とから成つています。

『帝紀』は初代天皇から第三十三代天皇までの名、天皇の后妃・皇子・皇女の名、及びその子孫の氏族など、このほか皇居の名、治世年数、崩年干支・寿命、陵墓所在地、及びその治世の主な出来事などを記しています。

これらは、朝廷の語部かたりべなどが暗誦して、天皇の大葬の祭儀などで誦しよずる習慣がありました。六世紀半ばになると文字によって書き表されたものです。

『旧辞』は、宮廷内の物語、皇室や国家の起源に関する話をまとめたもので、同じ頃に書かれたものです。

また、古事記の中の有名な歌として、須佐之男命が櫛名田比売と結婚して、新居を構えるときに歌った歌があり、これが「和歌の始まり」とされています。

八雲たつ 出雲八重垣 妻ごみに

八重垣作る その八重垣を

参考資料..

・ウイキペディア

・國學院大學

「古典文化学事業」ホームページ

## 二. 日本の国柄を探る

### 古事記という原点

実は、日本最古の書物とされる古事記は、単なる神話集でも、単なる歴史書でもありません。そこには「日本の国がいかに生まれ、どのような精神で歩むべきか」という、人間と自然と神々の関係を示す根本の姿勢が描かれています。

天と地が分かれ、イザナギとイザナミが国土を生み、数多の神々が登場する物語は、荒唐無稽に見えても、実は深い哲理を含んでおります。そしてそこには、「日本の国柄」、すなわち日本人が無意識のうちに大切にしている価値観のようなものが源泉の如く、あふれ出さんとしているわけです。

松本草垣女史が教えられた「天の理」もまた、この原点に通じています。自然と人間は分かつた

れず、万物は一つの大きな生命の循環の中にあ  
ります。

古事記に記される神々の働きは、実は天と地  
の理の姿を象徴しており、また、日本人が古来  
より「自然と共に生きる」ことを根幹としてき  
た証しでもあるのです。

### 古事記に息づく大和の国の精神

古事記の物語の中で最も有名なものは、天照大  
御神と須佐之男命の物語でしょう。天照大御神  
が天岩戸に隠れ、世界が闇に包まれるくだりは、  
「陽の光」と「和」の尊さを示しています。

神々が協力して岩戸を開き、再び陽の光が戻  
る姿は、「人と人との調和——仲良くすること  
——こそ国を立てる基盤である」との示唆に満  
ちています。草垣女史の教えである「仲良くが  
究極の目標」も、この神話に重なります。

また、ニギノミコトの天孫降臨において示  
される「宝鏡・斎庭稻穂・天壤無窮」の思想は、  
日本の国柄を端的に表しています。「鏡」は「誠  
実に己を映し、清く生きよ」という道を、稻穂  
は「人と自然が共に生かされる」農耕の理を、  
そして「天壤無窮」は「循環」の理を通して「天  
地とともに永遠に続く日本の国づくりの使命」  
を意味しています。

これらは、単に過去の神話に留まらず、現代  
を生きる我々の心に響く普遍の道標と言えます。

### 現代における古事記の意義

しかし、現代社会では、これらの教えが軽ん  
じられ、経済効率や利便性が優先されるあまり、  
人と人との絆、自然との共生が希薄になってい  
ます。

少子高齢化や地域の疲弊、争いによる「分断」

も、その延長にあると言えるでしょう。まさに草垣女史が説かれた「世直り」が必要な時代に、我々は生きています。

古事記を単なる古典文学として読むのではなく、「日本の国柄を映す鏡」として再び見つめ直すことが求められています。

そこには、人類共通の課題を解く鍵が隠されています。自然との調和を基礎とし、和を尊び、永遠の命の循環を信じること。この精神こそ、現代の危機を乗り越えるための道であり、未来を照らす光です。

### 元の日本に還る道

古事記は、千三百年の時を超えてなお、日本人の魂に語りかけています。それは、我々がどのような国柄を持ち、いかに生きるべきかを忘れないようにとの、天と先人からのメッセージ

です。

草垣女史が、「元の日本に還る」ことの大切さを示されたのも、この古事記の精神に通じています。

今、我々が目指すべきは、新しい何かを無理に創ることではなく、古より受け継がれた「日本のよさ」を再び生き直す——蘇らせる——ことです。すなわち、自然とともに生き、人と人とが仲良くし、自分一人ではなく天地とつながる、国づくりをする自分を自覚すること。これらは、未来に向けて我々が守り伝えるべき大事な宝です。

古事記を手に取り、日本文化の源流を思い起こすとき、そこに松木草垣女史の教えが重なり、現代に生きる私たちに「どう歩むべきか」を静かに示してくれます。

古代と現代、そして未来をつなぐ架け橋とし

て、古事記をもう一度深く読み直し、日本の国柄を再確認したいものです。

### 三、旧皇族歴史家から見た古事記

#### 日本の伝統精神がよくまとめられた古事記

さて、最後に古事記について日本人の精神性から述べられた著書を紹介いたします。

明治天皇の玄孫、旧皇族の学者、竹田恒泰たけだつねやす氏は、独自の「古事記観」を述べられています。

『日本がもつと好きになる神道と仏教の話』竹田恒泰・塩沼亮潤しおぬまりよしゆん共著（PHP文庫）より。

序文で竹田氏はこのようにおっしゃっています。

「戦後、日本人は、神仏を軽んじるようになり、カネの魔力に取りつかれてしまった人も多かったです。目に見えないものよりも、目に見

えるものに価値を見出すようになってしまった」

「しかし、平成二十三年の東日本大震災を機に、日本人の精神性が取りざたされるようになりました。私たちは震災により、経済的豊かさだけでなく、心の豊かさの価値を再発見したのではないでしょうか。被災地で耐え忍ぶ人々の姿が世界に感動を与え、日本人が誇りを取り戻したことは、将来の日本にとって、大きな意味のあることです」

竹田氏は、この震災で見えてきた日本人の心の豊かさという「宝」は、「美しい日本人の生き方」を示すものなので、日本の大元となる古事記に触れてみようというわけです。

第一章「古事記と天皇と大自然の摂理」の中では、旧皇族ならではの視点から、我が国の成り立ちや、日本の伝統精神のありようを直言し

ています。その著書の要旨です。

### 古伝承をまとめ直した日本最初の歴史書

・古事記とは、例えれば、お釈迦様の経典のよ  
うに、「何かを教えよう」とか「真理を説こ  
う」といった目的でつくられたものではなく、  
日本に伝わる「古伝承をまとめ直した日本最  
初の歴史書」です。

・当時すでに、日本各地に古伝承が存在してお  
り、何百年あるいは千年以上前から口伝に  
よって物語が語り継がれてきました。それを  
体系的にまとめ直したのが『古事記』です。

新たに創作された物語ではなく、物事の真  
理が描かれている、自然体の物語です。

・大事なものは、古事記に描かれた自然観で、日  
本人が縄文時代、つまり一万年以上前から育  
み、体感してきたものであり、日本人が森の

中で考え、海の近くで考え、見て実行してき  
たこと、そのままが表れている、ということ  
です。

・編纂を主導した太安万侶という、日本史上、  
五本の指に入る天才が、もともと細切れだつ  
た地域ごとの伝承を、一つの体系だった物語  
としてつくり直しています。

・例えば、出雲大社の大国主神、愛知県の熱田  
神宮の草薙剣、伊勢神宮の天照大神や八咫鏡、  
あるいは南九州に伝わる天孫降臨神話、これ  
らをも一つの物語としてパッケージ化し、『古  
事記』をつくりあげました。

・共著者の塩沼亮潤氏は、日本人には昔から考  
えたり論じたりすることが少ない傾向がある、  
といいます。「言挙げことあせず」という言葉があ  
り、哲学や道理を主張しない代わりに、大自  
然の中に秘められた「真」の心を素直に享受

する習性があつて、これが今日までの、日本固有の文化に受け継がれてきている、と話しています。

・また、塩沢氏は、諸外国にも神話はある、ときには精神的な昂揚や、ときには人生を善き方へと導き、夢や想像力を与えてくれます。

我が国における『古事記』の存在は、まさに国の宝ともいえるもの、とも語っています。

・古事記は「創作」と考える人もいますが、歴史小説も書く竹田氏は、「何の根拠もなく作ることではできません。むしろ史実と考えるのが自然で、いわば、古事記は、一種の歴史小説であり、ベースとなるのはやはり史実」だといえます。

・神武天皇の東征伝説を例えれば、出発点が南九州の日向国、到達点が奈良の橿原宮ですが、その道中にも遺跡や古伝承が残っており、そ

う考えたとき古事記は、もともと地域ごとの古伝承をつなげたものと言いつつ、実際にあつた出来事も多く記されています。

・日本人の気質をつくつたのは四季と同時に豊かな山と海があること、そして海によつて隔てられた環境が大きいでしょう。

・この四季というものが、日本人の心情に大きな影響を与えています。四季の変化を敏感に捉え、詠み込んでいる「歌」を見てもよくわかります。

・日本の国土は海に隔てられているため、他国との争いもほとんど起こりませんでした。韓国出身で日本に帰化した呉善花さんによると、朝鮮では千年で二千回、他国に攻め込まれているそうですが、日本は千年に数度しか攻められなかったそうです。韓国では「よそ者を見たら敵と思え」と教わるそうですが、日本

人は「さあ、上がってお茶でもどうぞ」といった感じだといっています。

### 戦いによらず統一王権を築いた天皇の独特さ

- ・ 天皇が、戦いとは無縁のところにあつたことに大きな意味があります。日本の統一王権は戦争を経っていません。これは考古学で主に四世紀と分かっていますが、古事記の記述と矛盾しません。

- ・ 戦争なしに統一王権ができた国は古今東西、日本以外にありません。「和」という考え方は日本だけのものではないですが、実践したという意味では他に類を見ないでしょう。国づくりの始まりから和を実践してきているのです。

- ・ 大和朝廷が軍事力を背景にした王朝ではないことを意味しています。これは「世界の奇

跡」、「人類の奇跡」です。

### 古事記が綴る大自然の摂理

- ・ 古事記の世界では、我々日本人の営みと大自然の深い結びつきが随所に感じられます。自然と人間との交流が脈々として流れていることに改めて驚かされます。竹田氏はこう言われます。

「まず、天照大御神という太陽の神様が、神々の住む高天原の統治者という点が象徴的です。太陽の光は、地上のすべての生き物のエネルギー源といえます。植物は光合成によつて生長し、その植物を食べることで動物は生きる。結局は人間も、太陽エネルギーによつて生かされているのです。このことを現代人は科学的知識の積み上げによつて知っていますが、科学的知識などない古代の日本人も、太陽を生命の源と

考えていたのです」

「だから天照大御神が天岩戸に隠れて世界が真つ暗になると、みんな困ってしまった。『天照大御神がいるから世界が明るい』というだけの存在なら、高天原の統治者にはならなかったと思うのです。たんに明るさの問題でなく、そこに生命の根源を見ていた。古代日本人は森の中で、海の周辺で、川のほとりで暮らし、考えることで、大自然の原理や摂理を感じていたのでしょうか。それを『古事記』で綴られているような物語に仕立てていった。そう考えると昔の人の感覚は、本当に鋭かったと思います」

### 統治を考える欧米人、調和を考える日本人

・欧米では、自然とは人間に害をなすもの、それを人間力で克服しなければならぬと考えられていました。聖書にも「神は大自然の

管理を人間に委任した」と書かれています。

・西洋人は、大自然を克服して初めて人間は幸せになれる、という発想があり、「大自然を統治する」と考えました。

・日本の場合は、豊かな山、豊かな海に恵まれ、食べることに困らない、有難い大自然です。神と仰ぎ、大自然の摂理にかなった生き方をしたため、大自然と調和の取れた社会になったのです。

・このことは、人間同士の社会においても同様で、昔の日本の村落は自然な、いいコミュニケーションのとれた生活が可能でした。

この発想の違いは、さらに「シラス」と「ウシハク」という、日本と西洋の統治方法の発想の違いに発展していると考えられます。西洋ではウシハク。所有するという意味があり、いわ

ば、人々を力で支配する、これに対して日本では、シラス、つまり「知らず、一体化する」という意味があり、国のあり方に明らかな違いがあります。これは成つてきた建国以来継続する一君万民という形の基となる「思い」でもあります。

以上、旧皇族竹田恒泰氏・塩沼亮潤氏の著書を中心に、古事記を紹介させていただきました。



日本がもっと好きになる  
神道と仏教の話  
竹田恒泰／塩沼亮潤 共著  
(PHP 研究所)

おもい

# もつたいないの生活様式

——福井の文化——

福井 酒井典康



戦後生まれに等しい、昭和二十年生まれの私は、明治生まれのおばあちゃんと二人で生活を致しております。

というのも、父は教員でありましたが、肺結核を患い病院生活をしていました。学校も病院のそばにある学校に転校し、ほとんど家には帰らず、良くなると体力がないので、学校の用務員さんの部屋で寝泊まりし、余程でない限り、自宅には帰らない生活をしておりました。

おばあちゃんとの一日は、私が朝起きると、

おばあちゃんはずでに早く起きていて、炊いたご飯と味噌汁が出来ていました。顔を洗うや否や、仏壇に午前様（炊き立てのご飯）を供え、壺番茶をお供えするのが、朝の日課になっていました。

おばあちゃんがお経をあげる間の二〇分間、後ろで私はじつと正座をして控えていました。おばあちゃんは私のことをいつも「坊」と呼び、お経が済むと朝食が頂けることになっていました。温かいご飯と味噌汁と漬物（梅干し）の三

点セットの食事です。

おばあちゃんは、私の食事が済むまで給仕をしてくれて、自分は食べずにじつと見ていました。正座で食事をしなければ、食べるべからずとの決まりがありました。「いただきます」「ごちそうさまでした」を言わない限り正座を解くことはできない、厳しいおばあちゃんでした。

ある時、「ごちそうさまでした」と言うと、「やり直し」との命令でした。「何ですか」と聞くと、お茶碗にご飯が一粒ついており、お茶で「おゆすぎ」がしてない、とのことです。その時、おばあちゃんは、お米一粒に神様が三人おられ、バチが当たるとのお話がありました。

更には、使った茶わんや皿もお茶で「おゆすぎ」をするのです、との厳しい食事作法の伝授でありました。もちろん、おかずは絶対に残すことはできませんでした。食べられないなら、

最初から皿に盛るのを「少しにして下さい」というべきである、との躰でした。以来、我が家では、食事に厳しい躰の指導が続きました。ですから、今でもそれが自分の中に残っています。「もつたいない」の文化は、その頃（四、五歳）からの家庭教育であろうと思います。お陰様で、私の子供たちにも同じ教育をしたことを今もよく思い出します。

「もつたいない」は全ての生活に生きており、捨ててもよいようなものでも繕って使用する。畑で出来たものは葉っぱの先まで全て食事で頂く、庭で掃いた落ち葉でさえ、囲炉裏の熱源に使用する。自然の山や河川の堤防で食べられる食材を教えてくださいましたので、よく取りに行つたものです。何も買うことが不要であつたように子供の眼には映っていませんでした。畑には柿の木・栗の木・ザクロの木・梅の木・グミの木等、多

くの木が植えてあり、夏から秋にかけての間食は、自分の家で作られたもので、全て賄われており、実りを待つ楽しみがありました。

貧農家庭でありましたが、お米だけはありました。今のようにお菓子があつたり、おもちゃがあつたりはしないというより、買うことが出来なかつたのです。どこの家庭でも同じであつたように思います。

たまに、越前海岸の魚売りのおばさんが、リヤカーで魚を売りに来ました。お金がないのにどうするのかと見ていましたら、お米一升で魚二匹を買っていました。物々交換です。この時以外はお魚は食べられなかつたのです。お祭り等があつても、場売りの商品は買うことが出来ず見るだけでした。同級の友達が買うのを見ても、自分も欲しいとは思いましたが、親もいない、金もない、の「神社祭り」でありました。本当

に徹底したお金の要らない生活でした。それでも皆と同じように大きく育ちました。

いま世界では、戦争や気象の変動で飢えに苦しんでいる方が多くいると報道で聞き及びます。反面、日本では年間二千万トン（二千万人分の食糧）の食糧廃棄物が出ているとも言われています。賞味期限切れ、コンビニで昨日の残り残パン等、考えられない食品ロスの時代であります。昭和二十年代の生活とでは、天と地の違いがあります。お金儲けに親が一生懸命なのは仕方ないですが、ザルで水を汲む生活様式は少し改める必要があるだろうと思います。ほんの少し工夫すれば、大きな無駄がなくなるものと感じている昨今であります。

# 三月下座奉仕を終えて

東京 大澤好之



令和7年4月から6月、第4回下座奉仕を終えることができました。皆様から多大なるご支援を頂戴いたしました。皆様から多大なるご支援を頂戴いたしました。皆様から多大なるご支援を頂戴いたしました。

道友必行といわれている「三月下座」がようやく出来た思いと、道に繋がってから40年もかかって申し訳なかつたとも感じています。

下座をする機会は14年前にもありました。お繋がりには昭和60年2月14日で28歳。出版社に勤務していました。その出版社を平成22年12月に54歳で早期退職する際、大変お世話になってい

た先輩道友お二人に熱心に勧められました。その当時は3人いる子供の長男が大学受験、長女が高校受験にあたり、とても3か月間家を空けるとは、自分でも思えなかつたし、まして女房に言い出すことも出来るわけがないと感じていました。

その後も他の会社に勤めていましたので、帰参はいつも1、2泊という状態でした。思いの中で「下座」はいつかしないと」とありましたが、中々かきませんでした。

昨年6月お式に帰参中、大阪のS氏が今年の4月から下座をする予定だ、と聞いてその場で「俺もやるよ」と言葉が自然に出ておりました。帰宅して、女房にすぐ、来年4月から三月の下座をさせてほしい、と頼みまして、何とか許しを得ました。昨年9月に今年の3月中旬で退社したい旨を会社に伝え、問題はないと思っております。

昨年10月末ごろのご垂示で、11月から理が3倍濃くなる とありました。その時は、どういう意味かな？ くらいに思っていました。11月にお式に帰参して帰宅した際、女房から、口内炎だと思っていた箇所がどうやら舌癌らしい？と言われました。驚いてはいけなないと教えられています。びつくりしたと同時に理が3倍濃くなるとは、このことかもしれない？これを、道の者として受け取らなければとの思いでいっ

ぱいになりました。

精密検査の結果「ステージ4」の舌癌で、なんとか手術可能とのことでした。11月下旬に入院し、12月2日に手術をして44日間の入院。その後は抗がん剤と放射線治療と続けました。また、同時期に一人暮らしをしている義母（女房の母）が軽い認知症とわかり、一人で生活するのは無理だろうとの判断から、1月14日から同居することになりました。女房の退院日が1月10日でした。義母の状態を考えると、家に戻すことは無理だろうと、女房、義母と三人で話し合い、義母の家を処分して高齢者向けの施設に入居することに話がまとまりました。その交渉と手続きは女房が術後で会話が困難なため、すべて私が二人の了解を取りながら進めていくことになりました。

この頃わたくしの頭の中には、「女房の術後

の様子」と4月からの下座奉仕ができるだろうか？ そのことばかりでした。そして、やるだけやって「下座」が無理ならしやうがないなど肚をくくりました。

今年の1月から3月は、今振り返ってみても良く過ごせたな！ と思ひ出すばかりです。

道の者は「一切合切 神はかり」と教えられています。女房の舌癩、義母の認知症をどう受け取つたらいいか？ まったくわかりませんでした。

そんな時、2月頃だつたと思いますが、先輩道友から「14年前、下座を進められたことを神はかりと思つてなかつたんじゃないの？」と教えていただき「はつと」しました。確かに先輩道友に熱心に勧められたぐらいにしか思っていない自分がありました。お詫びすると同時に、都合の良いときは道の理として思えますが、そ

うでなときは、自分（頭）が先なんだ、ということに改めて気づかせていただきました。

また、話はそれますが「国が危ない」と言われていますが、そのことが私は今一つ、肚に落ちていないことに悶々としていました。

軽い認知症の義母はしばらく話していると普通ですが、朝起きたときとか、一人でいる時間が長いと、せん妄というか、不安になり不慣れな地域も関係なく放浪してしまうことが、たまにありました。また、家の鍵をバツクに仕舞つて、大騒動になることもありました。そのたびに、私と女房で言い含めるのですが、義母には義母の理由があつての行動なのです。その行動は間違いで、何とか収まっているからいいけれど、そのうち大事になつたら大変でしょ。と説明するのですが、義母は言われたこと自体が心外といった感じでした。何度かそんなやり取りを

して、”なるほど”と思った時がありました。天上からみて私が義母の姿なんだ！と。ストンと肚に落ちた気がしました。その晩はお詫びとお礼をさせていただきました。

2月中旬から、放射線治療を通院しながらしていた女房の調子が思わしくなく、3月中旬から、再び入院することになりました。この頃は、何とか4月からの下座奉仕ができそうだ、との感触がありました。女房の退院予定は4月初旬とのことで、3月30日に帰参する私は家で会うことできないけれど、面会に行つて顔を見れるからそれしかないな、と思つておりました。3月26日に女房から連絡があり、3月28日金曜日に退院できるとのこと。2日間ですが家で過ごすことができることになりました。

まだ、女房の身上の意味をしつかりつかんで

いませんが、今後ともお行をさせていただきま

す。  
晴れて、三月下座奉仕に入らせていただくことができました。この時思つたことは、何事も、おやかたさまのお許しがないとなつてこない、ということでした。

下座奉仕は三人。福島のT氏、大阪のS氏。お二人とも、よく知つた道友です。毎朝4時50分起床を一日も休まず、3か月間実行したことが一番大変でした。

また、3か月間、場が立つときにご垂示を連続していただくことができましたこと。紫の間に連続して入らせていただけたこと。

朝、紫の間、松の間の清掃をさせていただけたこと。

そして草苑亭、記念館、駐車場も含めて場の隅々まで、見て、雰囲気、気配を感じることが

できたことも、私にとって貴重な体験となりました。

これまででは、場が立たない日に場にいることは頭になかった自分ですが、なんとも親不孝な思いであったとお詫びの気持ちです。

天の場に3か月間いることは、道友のみが許されている天からの褒美なんだ！ と改めて思っています。14年前、熱心に下座を勧めてくださった先輩道友から教えていただいたのは、「下座は、自分を下にして人さんにへりくだる意味の下座と、身の内の余分なものをさらってくださる。そういう働きもあると思うよ」との言葉が思い出されます。

皆様、今後とも、仲良くよろしくお願いいたします。

(令和7年9月)



おもい

# おやかたさまの思い出

兵庫 畑尾万里子



この中に一人だけ……

三月下座をさせていただいたときのことです。

ひと月に一度、机を囲んで、おやかたさまのお話を聞かせていただきます。

隣にいつも常住の和田篤子さんが座っております。

二度目のご面接のことでした。

下座八人が、最初に、

「ありがとうございます」

と、申しますと、おやかたさまが、

「こつちの方が、ありがとうございます、よ」と、言われました。そして、

「この、ひと月は、どうでしたか?」

と、少し笑いながら尋ねられました。

そのとき、私は、すべて、お分かりなんだ、と思いました。そして、

「ちつとも喜んでない人は一人もいらつしやいませんね。喜んで喜んで、たまらなく喜んでいる人も、一人もいらつしやいませんね」

と、言われました。八人とも恥ずかしかったのですが、笑ってしまいました。

それから、和田さんに向かつて、

「この中にもものすごく、ものすごい『我の人』  
がいるの、みんなじゃないの、一人だけよ」

そして、

「自分で分かっているはずです。直しましょう

ね」

と、言われました。

そのとき、「コッソソ」と音がしました。

おやかたさまが、

「今、コッソソと、おでこ打ったの誰？」

と、笑いながら言われました。

「私です」

と、一人の方が恥ずかしそうに言いましたら、

「気をつけるんですよ」

と、少し厳しく言われました。

そのとき、突然、年上の方が、

「我が強いのは私です。ごめんなさい」

と言いました。おやかたさまは、

「あなたとは申しておりませんよ」

と、言われました。そして、

「ご自分がそうお思いになるのであれば、お直  
しなさいませ」

と、言われました。

私たちは圧倒されて、うつむいていました。

そのときは、分かっていたいなかったのですが、  
後になって、八人の一人ひとりが、自分を省み  
ないといけなかった、と思いました。

我の強い八人にやさしく、厳しく、教えてい  
ただいた、と思います。

**ここを生まれ故郷のように思つて**

三度目のご面接では、

「お金のことを苦にするべからず、お金は必要  
なとき必要に応じて天が回すんです。これから

は徳の時代なんですからね。徳がものをいう時代なんですからね。徳がものをいうのですからね」

「ここにしっかりと、徳をはめ込んである」

と、言われました。道の婦人は、

「ここを生まれ故郷のように思つて戻つて来ると、お手伝いするのよ」

と、いただきました。

「うれしい自分になるんですよ。喜ぶことを探さない」

とも、言われました。

皆さんで練り合ひして、色々教えていただきますと思います。



# 伊藤仁齋

——江戸時代の儒学者——

東京 泉崎博明



## 朱子学を本格的に学ぶ

仁齋は、江戸時代初期の寛永四年（一六二七年）、京都の堀川というところで、材木商を父に持つ町人の子として生まれました。武士ではなく町人の子です。そして、一一歳から「四書」を学び始めます。この二つの事が、伊藤仁齋という大儒学者を生む大きな要因になっていると思います。

十代の少年がおそらく、素読つてやつを徹底してやらされたはずですね。反復を重ねて、理

屈抜きで漢文を覚え込むわけです。まさに体で覚えるという事です。このとき、すでに仁齋の中の、儒教的な徳、つまり「仁」という徳が目を覚ましてしまったのではないか、と思うのです。

彼はやがて二十歳の頃より、朱子学を本格的に学びはじめます。すでに仁齋は無類の読書家になっていて、仏教、道教、陽明学にも研究の範囲を広げていきますが、それらは彼の知的探求心を満たす対象ではなかったようです。

朱子学の研究が深まるほどに、「何か違うな……」という違和感が増していくのでした。朱子学は確かに深く綿密に構築された立派な体系ではあるが、孔子、孟子の思想を純粹に継承してはいないのではないか、と思うようになったのです。

朱子学は、中国の宋の時代に、朱熹（しゆき一一三〇年〜一二〇〇年）という人物が、提唱した学派です。彼は、儒教を深く研究したうえで、より体系化された思想に仕上げようとして、その当時、非常に盛んであった仏教、道教、などの教え、哲学を取り込みながら、宇宙論ともいえる新たな儒教理論を構築し、それを「朱子学」として提唱したのです。朱子学が「新儒学」とも呼称される所以です。

朱熹は、まず「理氣二元論」という思想を打ち出します。

……「理」とは、宇宙の根本原理、天地万物を貫く普遍的な法則、あるいは万物の存在する根拠、天理、などと定義します。それはまた天道、人間に備わる道徳的な本質ともいえるものです。

……「氣」とは、万物を構成する物質やエネルギーです。人間の感情や欲望として現れる「情」も「氣」の一部とされます。「理」が万物の存在する原理、「氣」が万物を構成する要素ということです。

そして、この「理」と「氣」の相互作用によって、この宇宙の万物が生み出されるとしています。朱熹は、続いて、「性即理」という朱子学の中心的な考え方を提唱します。

……「性」とは、人間が生まれながらに持っている本性であり、それこそ、宇宙の根本原理で

ある理（天理）そのものである、というものです。朱子学においては、それらは、儒教の五常の徳（仁・義・礼・智・信）で構成されると考えます。

人間の心は「性」（天理）と「情」（感情や欲望）から成り立っているとして、本来人間は善なる存在ですが、個々人の持つ「気」の清濁や、情によつて天理が覆い隠されてしまう危険性があると考えたわけです。そこで、聖人をめざすためには、修養によつて「気」の濁りを取り除き、本来の善なる「性」（天理）を明らかにする努力が不可欠だと主張したのです。朱子学では、そのための実践方法を「居敬窮理」といいます。

……居敬とは、静坐瞑想を通して、心を常に慎み深く保ち、雑念の無い清澄な精神状態を保つこと。

……窮理とは、経書などの読書を通して、一木一草に至るまで、あらゆる事物の道理や本質を徹底的に極め理解すること。

そして、朱熹はこのふたつの修養法「居敬」と「窮理」は車の両輪であるとしたのです。

さらに、朱熹は、「天は尊く、地は卑い」という上下関係が絶対である如く、人間社会の上下関係を非常に重んじる道徳観をも生み出しています。

### 神経症に？

さて、伊藤仁斎は、二十代の初めから、朱子学の「情」をコントロールする修養法の一環として、「居敬窮理」の実践に没頭します。朱熹の教えでは、この世の万物にはそれぞれに「理」が内在されていて、それは人間の表面的な心を静めることによつて、その「理」がみえてくる

というものです。「情」を抑え、深く内省することによって「理」というものが見えてくる、という教えを信じ、若さゆえの純粹さから、真剣に自己内面の「理」を把握しようと努めたといわれますが、現実には、幾ら励んでも一向に「理」なるものが感得できない。見えてこない。「一体これはどうしたことだ？」という煩悶に苦しんだといえます。

やがて、この修養法にあまりにも没頭しすぎた結果、精神的な不調を来たしてしまいます。自己の内面に集中するあまり、世間との交わりはほとんど絶たれることになり、一時は自宅の庭にさえ出歩くこともできなくなってしまうたと伝えられています。

仁齋二十八歳のとき、この病を契機として、家業をすべて弟に譲り、改めて学問一筋の生活に入るようになります。現代的に言えば、神経

症という病気でしようが、このことが仁齋にとつて大変大きな学問的転機をもたらします。

彼は、朱子学の修養法が、人間を非現実的な内面世界に閉じ込め、現実の社会生活を疎外する危険性があるという事を自らの経験を通して知ったのです。

こうしたことの反省から、仁齋は、内面の静寂よりも、現実世界での行動や、人と人との活発な交わりが大事なことで、そうした社会的実践を通してこそ、本当の仁（人を愛する心）を体得できると考えたのです。

### 朱子学を批判——古義学の誕生

仁齋は朱子学についてかなりきつい批判をしています。「朱子学は、身分の区別ばかりをうるさくいつて、人間らしい感情を抑制することをすすめる、形式的、独善的な教えである」さら

に「朱子学は残忍酷薄である」「一毫一欲の私無きは、亦、形骸を具え人情ある者の能く為すところに非ず。(童子問) (一片の欲も私心もないなんて姿形も人情もある人間にはありえないことだ)」とまで批判しています。

仁齋は、朱子学を排し、「儒学は、孔子とその意を忠実に受け継いだ孟子の思想にもどるべきだ」と主張し、「古義学」という儒学派を新たに立ちあげ、京都堀川の生家に家塾「古義堂」を開いたのです。時に寛文二年(一六六二年)、仁齋三五歳の時でした。

### 徳の根源は「仁」

仁齋は、徳の根源は「仁」であり、それは、人間の内にある自然な情愛であり、他者を思いやり、常に他者の良い面を見ようとする心構えにその源があると考えました。そして、各個人

が日々の生活の中で実践努力することによって体得されるものであるとしたのです。

仁齋の「仁齋日札」という書のなかに、こんな言葉があります。「仁者は毎に人の是を視る。不仁者は毎に人の非を視る」ちよつと耳の痛い言葉ですが、これは、非常に大事なところをついていますね。日ごろのこうした心がけが、人生の幸不幸にとつともなく大きな影響を及ぼしているということは、結構見過ごされていながら、間違いのない真実であろうと思うのです。

もう数十年前のアメリカのお話です。仮にミス夫妻としましょうか。ミス夫妻には、エミリーという一人娘がいます。母親のミス夫妻とエミリーとは、上手くいっているとは言えません。二人はしばしば衝突します。夫人はエミリーを人前も構わずにきつく叱ります。「全くいたずらばかりして。しょうがない子ね!

だんだん悪くなるばかりね」

ところが、父親のスミス氏は、目に入れても痛くない、といった可愛がりようで、エミリーは、まさに「小さな天使」で自慢の娘です。第三者から見れば、「人には長所もあれば、短所もある」と言うでしょう。しかし、もう少し鋭い観察をして見てみると、エミリーの行動には、大変重要な別の一面があることが分かったのです。エミリーは父親の前では、全く天使のようであり、母親の前では、母親の期待する通りの小さな悪魔に変貌するというのです。

人間は、無意識のうちに、期待に応じて行動するようです。スミス氏はエミリーの欠点には目をつむり、良いところばかりを見ているのです。伊藤仁斎流に言えば、エミリーの良いところばかりを見ているスミス氏はまさに仁者、エミリーの「非」ばかりを見ている夫人はまさし

く「不仁」という事になりますね。

ここで、大事なことは、自分を仁にするか、不仁にするかは、一に懸かって自分の選択次第ということでしょう。その習慣が、その後の人生の仁・不仁を決定づけていく……。

### 孔子の「仁」——楽しむことの重要性

さてここで、儒教の祖、孔子について、少し触れておきましょう。孔子（紀元前五五二年～四七九年）は、氏は孔。生まれた時、頭が平低で、丘のようであったことから、丘きゅうと名付けられた。字を仲尼ちゆうじ。春秋戦国時代、魯という小国に生まれました。父親は軍人といわれています。「子」とは「先生」といった意味ですね。ちよつと驚きですが、孔子が誕生した時、その父は、七十七歳、母は第三夫人で十六歳であったという事です。

そして、間もなく孔子三歳の時に、父親が亡くなり、その後は、母親の手一つで、貧乏の中に育てられたのです。少年時代より、暮らしを支えるために、さまざまな仕事、たとえば倉庫番とか、牧畜の仕事などにも従事したようです。どの仕事も非常によくできたという事です。こうした幼少期から少年時代の卑賤な貧しい暮らしが「人間について深い凝視を寄せた偉大な大聖人を生み出した」と彼の司馬遷が「史記」の中で述べています。

孔子の母親は靈感のある下級の巫祝<sup>みこ</sup>で、葬送の儀式を司つたり、特に雨乞いの儀式を司ることをなりわいとしていたようです。そうした巫祝は一般に「儒」と呼ばれていました。「儒教」という名前はここからきているのでしょうか。孔子は、幼少から母親のそうした姿を身近に見ながら育つたために、降霊現象、シャーマニズム

について十分に知っていたと言われています。

孔子の面目は、「私心の無き」と「他者への愛・思いやり」でしょう。まさに「仁の徳」です。それは「天」に対する深い畏敬の念からきていると思うのですが、儀礼を執り行う巫祝としての母の姿を身近に見ていたこと。その影響も非常に大きいものがあつたと思います。

孔子は、自分の周囲の観察から、ある事実に気づいたので。「私欲の少ない状態で社会の中にいるときに、接する社会が円滑になる」という不思議な働きがあることに。そして、この不思議な働きを拡大できれば、混乱する社会の統治に使えるのではないかと考えたのです。これが孔子の儒教の始まりだと思えます。

孔子は、一時期は、中央の政界において華々しく活躍しましたが、多くは弟子を連れて諸国をあてもなく旅をし、その思想は容れられず、

失意のうちに故郷にもどり、晩年は弟子の育成に専念したと伝えられています。しかし、「失意のうちに」であつたかどうかは、一概には言えません。弟子は三千人を超えていたというのです。当時の状況がどうあれ、孔子の人格的魅力が横溢していなければ、そんなに多くの人が孔子の元に集まるわけがありません。察するに、孔子は、いつも、陽気さ、温かさ、優しさ、明るさ、楽しさにあふれていたと思うのです。

論語にこんな言葉がありますね。「これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず」

昔から、「好きこそもの上手なれ」という俚言がありますが、孔子はもう一歩進めて「楽しむ者に如かず」と言っています。

学問するのも、仕事にしても、楽しむことの重要性を教えて下さっているのですが、たぶん

人生の心構えとしても大いに参考にすべき言葉だと思っています。わたしは、この文章の背景にある出来たてホヤホヤの儒教の、のびのびしたおらかな雰囲気がとても好きです。孔子と弟子たちとの和気藹々の楽しい情景が目には浮かぶようです。

一見平凡で簡単な事のようにですが、儒教の真骨頂はこのあたりにあるのではないかと思つているのです。まさに「仁」の風光とでもいいましょうか。それは、非常に明るく、屈託なく、楽天的な精神です。言うまでもありませんが、伊藤仁斎もきつとそのような人物であつたことでしょう。

明治の頃、彼の渋沢栄一は、「右手にそろばん、左手に論語」と言い、いつも「お金(収入)は働きの滓だ」といつて働くことを大いに楽しんでさうです。

「日本儒学」ともいえる「古義学」を起し、生涯、京都堀川を一步も出ず、市井の一学者として、弟子三千人を教え、当時の儒者の七割が古義堂の門を潜つたという伊藤仁斎こそ、まさに心優しき傑物儒者でありました。



伊藤仁斎  
(堀川門人による肖像)  
Wikipedia より

この道とおる

# 大切なお客様と有難いお客様

東京 関塚 禎人



お店をやっておりますと、御予約をいただくお客様やフリーでお越しになるお客様がいらつしやいます。

二階に大勢でコース料理をお楽しみいただける個室があります。

ある日、その個室に初めてお越しになるお客様から二名で御予約をいただきました。個室はお二人でもお使いになれます。ご希望通り二名様で御予約を承りました。

その後、少し遅れて常連のお客様から個室を十五名で使いたいと御予約のお電話が入りまし

た。

先に二名様で御予約を頂いている為、十五名様の御予約は丁重にお断りいたしました。

お店のスタッフから「二名よりも十五名のお客様の方が利益率が高いから残念」と言う声を耳にしました。

もちろん売り上げとしては十五名様の方が高いと思います。

お店の事を気にかけてくれるスタッフの思いは理解できますし有り難くも感じます。しかし、私はたとえ少人数であつても先に御予約をいた

だいた方が優先であるべきではないか！ と心の内だけで話をしておりました。

予約をお断りした常連のお客様は別のお店を見つける事ができたのだろうか？ と案じながら、二名のお客様がお越しになる日を迎えました。

そして、お帰りになる際、

「雰囲気のいい、歴史を感じさせる落ち着いたお店で、料理もとても美味しかったですよ」

と、仰っていただきました。

数週間後、このお客様から師走に大勢での忘年会の御予約を頂きました。

そして、この忘年会でお越しになったお客様が当店を別のお客様へご紹介いただき、そのお客様から、また別のご紹介をいただくようになりました。

今では始めに御予約いただいた二名のお客様

は古い顧客となり、一方でお断りした常連のお客様からは「断られるほどお店が繁盛して安心してたよ！」と言われます。

お店は、店主が作っているようではありませんが、実はお客様にお店を築き上げていただいているように思われます。

二十数年前に、生前の父が療養中の病院のベッドで何の気なしに語ってくれた話を思い出します。

お金をいただくお客様は、もちろん大切なお客様ではありますが、本当に有難いお客様といえるのは長年お店に荷物を下ろしてくれている仕入れ先の配達の方々である。この方々も別の意味でのお客様だと思つて大切にしないといけない。

配達の方々は一日に何十件もの店舗に配達を

する訳ですから、その店の雰囲気やおいなど、色々なものを目にしています。口には出さずとも、その店の良し悪しをよくわかっておられる。よいお店には、色々な情報もこぼしていつてくれます。

だからこそ、お金をいただくお客様だけでなく、配達の方も大事なお客様であり、大切に接していくことが道であると、私に語ってくれた事があります。

私が若い頃は低く静かな声で話してくれた父の言葉を、右から左へ流してしまいうこともありました。耳に痛い言葉を聞き流した事もあります。忘れてしまった話もありますが、困った時、判断に迷った時、苦を受け入れる事ができなかつた時、声にくれた父の言葉が湧き出てきます。そのような時には必ず父と同じように

思える自分になってしまつております。

道を真剣に受け取っている時は、その思いが濃くなつており、あやふやな時は薄くなつていくように思われます。

生前の父から仕込まれた声は味噌の仕込みと同じで、聞かされていたその時、味噌を仕込んだその時は、辛<sup>から</sup>く塩<sup>しよ</sup>つばいだけであります。ですが、三年経ち、五年経ち、十年が経つた時、その仕込み味噌が美味しくなり、父の話の意味を理解する以上に、声が、私の体の中にあり、辛くも塩<sup>しよ</sup>つばくも、有り難く湧き出してくるのであります。

天より仕込まれたおやかた様より仕込まれ、私に蒔いていただいた種から芽を出し、幹にするのは自分自身であるのだと深く感じております。

# たづぬる人のことの音か

神奈川 芹澤和彦



祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響あり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰のことわりをあらわす

おごれる人も久しからず

ただ春の夜の夢のごとし

たけき者もついには滅びぬ

ひとえに風の前の塵に同じ

(訳)

祇園精舎(スダツタというお金持ちの信者が釈迦のために建てた寺院)の鐘の響きは、諸行無常の道理を示し、釈迦が亡くなったとき、全ての枝が枯れて白くなつてしまったという沙羅双樹(インド原産の常緑樹)の花は盛者必衰の道理を示している。

(以下省略)

あまりにも有名な『平家物語』の冒頭で、暗

記している方も沢山いらつしやることでしよう。

『平家物語』は、軍記物といわれます。ところが、源氏と平氏の合戦ばかりが描かれているではありません。夫婦の絆、親子の絆、そして主従の絆等が、生き生きと描かれていて、それが読む人を魅了するのです。

ここで登場するのも、武者ではなく、宮中一の美女であり、琴の名手でもある「小督」<sup>こくす</sup>であります。

保元の乱(一一五六)と、平治の乱(一一五九)の二つの戦いに勝利したのは、後白河天皇(後に後白河法皇)に味方をした平清盛でした。その結果、後白河法皇に深く信頼され、ますます出世していきます。さらに権力志向の清盛は、娘の徳子(のりこ・とくし)を高倉天皇(第八十代 母の滋子は清盛の妻の妹)の女御(後に中

宮)として入内させる。

清盛はついに天皇の外戚の地位をねらうことになり、貴族たちの反感がいつそう高まることとなった。もともと平氏は天皇の后妃を出す家柄ではない。それをおさえて一一七一年、清盛は強行してしまったのだ。

ところが、中宮の徳子に待望の皇子の生誕がみられなかった。そんな背景の中で小督の事件が持ち上がってしまったのだ。

当時、高倉天皇は、中宮付きの女房に仕える「葵の前」という女を心から愛していた。ところが、その寵愛の様子が公然ともてはやされてしまったので、帝王の徳を失うことを心配し、恋情を抑えて逢瀬をやめてしまった。やがて葵の前は帝の真心を知ったが、病に倒れ、里に帰る。だが、五、六日して死んでしまった。

葵の前を失って嘆き悲しむ帝(高倉天皇)を見

かねて、中宮徳子（清盛の次女）は、小督という女房を紹介した。この女房は、桜町中納言重教（成範）の娘で、宮中一の美人で、琴の名手でもありました。

小督は、以前冷泉大納言隆房卿（清盛の長女の婿）が若く少将であつたころ、見染めた女房です。少将は、歌を詠み文を贈り激しく迫りますが、なびく様子は少しも見せません。しかし、やはり隆房の心情にほだされたのか、小督は受け入れてしまいます。

だが、今となつては、帝に召されてしまい、どうすることもできません。名残尽きない別れに涙は止まることなく、袖はびつしより濡れて乾くことがあります。必死の想いで文を贈りますが、小督は帝に対して心やましいと思つたか、手にも取らず下女に捨てさせてしまいます。隆房は家へ帰り、こらえきれず歌を贈ります。

たまづさを今は手にだにとらじとや  
さこそ心におもひすつとも

（訳）私の手紙（たまづさ）を、もういまとなつては手にとつてくださらないのですか。それほど思い捨てられたとしても、手紙くらいは受け取つてくださつてもよろしいのに。

と言つて、悲嘆のあまり死を望むようになってしまいます。

これを知つた清盛は、怒りがおさまりません。自分の娘の婿（隆房）を取られ、娘の中宮徳子は、まだ高倉天皇との間に皇子の生誕がないのに、小督という女房を愛されるようになってしまったのです。

二人の婿（高倉天皇と隆房）をとられた清盛

は「小督がいるかぎり、夫婦仲は良くなるまい。呼び出して殺してしまおう」と言ったところ、それを漏れ聞いた小督は、「自分はどうか成つてもかまわないが、帝の身に万が一のことがあつてはたいへん」と、ある夕暮れ、内裏を出て、どことも知れず姿を消してしまいます。

それからというものの、高倉天皇は、日々涙にくれてしまう。しかし、嘆いてばかりいても何もはじまらない。八月のある夜、宿直の源みなものなかくに仲国を呼びます。

仲国は笛の名手で、かつて小督の琴にあわせて演奏したことの有る人間だ。帝は「嵯峨野あたりに、片折戸（両方に開かず一方だけに開く片とびらの戸）の庵をかまえて小督は隠れ棲んでいるらしい」

「その家の主の名は分からないが……」と、なんともはつきりしない。仲国は「その家の主の

名がわかりませんでは」と答えると、帝はもう涙をうかべてしまつてゐる。お気の毒にと思つたそのとき、ふとあることを思い出した。

そうだ、小督殿は琴の名手だ。こんな月の明るい夜は、帝のことを思つて琴をひいてないはずはない。仲国は、笛を合わせたこともあり、その琴の音なら、すぐ聞き分けることができるはずだ。そう決心すると、「それでは何とか尋ねてまいります」と答えます。

もし小督にめぐりあえたとき、帝の使いとして信用されないと困るので、帝の文を頂き、愛用の笛を持ち、御所で借りた馬に乗り、名月のもと嵯峨野めざして出かけていく。

この場面、名月の夜の嵯峨野行は軍記物とはとても思えない『平家物語』の中でも、最も美しいところだ。当時の嵯峨野は、現在のようにな家々がたくさんある所ではない。今の天龍寺

や苔寺などなかつたさびしい所であります。鹿の悲しい声を聞きながら、月光に光るススキの原を馬で恋の使いがいく、まるで平安の王朝絵巻といつていいでしょう。

仲国は、あちこちたずね歩いて、とうとう嵐山近くに来てしまった。近くには法輪寺という寺がある。そこも探してみたが小督は見つからない。亀山（天龍寺の後の岡、その形が亀に似ているため）のあたりまで来たとき、松がひとむらあるあたりから琴の音が、かすかに聞こえてきた。

峰の嵐か松風か

たづぬる人のことの音か

はつきりとはしないが、馬を早めて行くと、片折戸の家の中で、見事に琴を弾いておられる。

かたわらで聞いていると間違ひなく小督殿の爪音であります。しかも、その時の曲は、夫を想うという「想夫恋そうふれん」であつた。

仲国は、小督殿のなんと心のやさしさよと想いつつ腰から横笛を抜き出し、ひと口吹いてから、門をたたく。「内裏から参りました仲国でございます」中からは何の返事も無い。それでもあきらめずに叩いていると、一人の少女が「お門ちがいではありませんか。こちらは宮中よりお使いを頂くような家ではありません」その声に仲国は返事もせずむりやり中に入つてしまつた。

「小督殿、どうしてこのようなところに来ておしまひになつたのですか。帝はあなたさまのゆえに想いお悩み、今はお命も危ないほどでいらつしやいますぞ、私の申すことは、うそではございません。このとおりの文も頂いており

ます」と、おつきの女房に手渡す。

やがて女房を介して小督の文と仲国へのお礼の品が渡されるが、それではらちがあかぬと、「直接お声をお聞かせ下さい」と言つて小督に近づく。そこで初めて小督は本心をあかす。

「貴方もお聞きになつていますね。入道相国にゅうどうしやうこく

(清盛のこと。相国とは太政大臣の別名) 殿が、あまりに恐ろしいことを言うので、ここまで逃げてまいりました。こんなわび住まいでは、琴もひくこともなかつたのですが、明日は大原の奥へでも行つてしまおうかと思いましたが、この家の主の女房が、お名残にぜひ一曲と申しますので、つい琴を手にしてしまつたのです」といつて涙を流しますと、仲国も共に袖をぬらします。しばらくして、仲国は涙を抑えつつ申します。

「明日は大原の奥ですと、それでは剃髪して尼

になるおつもりか。決して出家などなさつてはなりません。そんなことをして、帝のお嘆きをなんとなさるおつもりか」と申し上げ、さらに自分の供のものに「この家から小督殿をお出しするな」といつて馬に乗り急ぎに急いで宮中に戻る。帰りついたころは明け方近くであつた。

誰を通じて帝に申し上げたらよいのか、思案しつつ紫宸殿ししんでんのあたりまで来ると、なんと帝は昨夜おられた同じ場所におわし、かすかに漢詩を口ずさんでおられた。仲国は急いで近づき、全てを報告すると、「それでは、すぐ今夜つれてこい」との帝の命令に、そんなことをしたら清盛がどんなに怒るか気になりましたが、従うよりしかたありません。

急いで牛車の準備をして嵯峨野に向かいます。小督は戻るのをいやがったが、やつとのことになだめすかして牛車に乗せて宮中にそつと引き

入れ、人目のつかない所に隠して置いて、夜な夜な帝の寝所に召し出した。

やがて小督はみごもり、姫宮を産む。節子内親王であります。こうなつては、とても隠しおうせるものではありません。ついに清盛の知るところとなり、烈火のごとく怒ります。自分の娘中宮徳子が、まだ子どもを産んでないのに、小督が皇女とはいえ、先に産んでしまったのだ。もし、男子出生ともなればそれこそたいへんなことになる。中宮徳子が高倉天皇の子の安徳天皇を産むのは、この一年後でありますから、清盛が怒り狂うのは、もつともと言えます。

「小督はいなくなつたと聞いてはいたが、それはまったくの大うそだつたのだな」と、小督をとらえ強引に尼にして追放してしまつた。もとより出家の望みはあつた小督ではあるが、心ならずもこんな乱暴なやりかたで尼にされたのは

悲しくも悔しくもあつたことでしよう。このとき小督、二十三才。黒い墨染の法衣を身にまとうあわれな姿に変わり果て、嵯峨野のあたりに隠れ住むことになる。まことに痛ましいことでありました。

このような悲しい出来事の連続で、高倉帝は病の床につくようになつてしまいます。この帝の死について「こうしたことが重なつて亡くなられたといううわさである」と結んでいる。

(完)



『嵯峨野の月』  
(月岡芳年『月百姿』)  
源仲国と小督  
Wikipedia より

〔補足〕

京都東山の清閑寺は、高倉天皇に寵愛された小督が清盛の怒りを買って、出家させられた場所であるといわれている。天台宗の寺として創健されたが、後に真言宗に代わり今日に至っている。

裏山には高倉天皇の御陵がある。そして、その東隣には、小督の墓と伝えられる一基の宝篋印塔がある。

本稿の“小督”は平家物語第六卷に登場します。同第九卷に登場する小宰相（“小督”とも呼ばれる）とは別人です。

〔参考〕

- ・新日本古典文学大系 平家物語 岩波書店
- ・平家物語の女性たち 永井路子 文春文庫
- ・平清盛と平家のひとびと 井上辰雄 遊子館
- ・源平の怨霊 高田崇史 講談社

## 編集後記

### 古事記と地方に伝わる伝承

◇「古事記の間違いを是正するんです」というお言葉があります。どういうことだろうか、そう思いながら古事記を読んできました。

◇元々、古事記は、日本の各地に伝わる古い伝承をまとめたものといえます。岐阜県の飛騨地方にも古い日本古代の伝承があります。

◇古事記ではこう書かれているが、伝承によれば実はこうだと、のちの飛騨の郷土歴史家が、古事記と伝承の

内容の違いを述べています。

◇それこそ、古代のことなのでどちらが本当か判別できませんが、古事記の間違いを考える上で、あるいは古い伝承と古事記との比較が参考になるかも知れない、と思いました。

◇因みに、ここ飛騨地方のそもそもの成り立ちについてこう記されています。

◇乗鞍の麓に純粋な日本人が長い間、平和で幸せに暮らしていた。その民族の中心として敬われていた人物を本家とし、そこから分家した家とが協力し、将来の日

本のことを見通して対策を立てながら暮らしてきました。

◇また、その人たちは、海を上がつてくる渡来人たちとの争いからこの国を守ろうとしていました。

◇これらは、元の日本人の姿を描いているようにも見えます。

◇また、飛騨で大昔から続けられてきた行事は、日本人の思いの元がこうして形作られたかもしれないと思わせるものでした。

◇「日抱ひだきの御魂鎮みたましづめ」の行事です。「日を抱く」とは、

太陽信仰を表しています。

◇飛驒の大昔の先祖が、乗鞍

岳の麓にある「丹生の池」

を囲み、その水面に映る太

陽、月の光をジツと見つめ

ながら感謝し、先祖を拝み、

精神統一をして心を静めた

と言います。

◇この「日抱きの御魂鎮め」

は、縄文時代以前から続い

ており、つい最近まで行っ

ていたそうです。

◇色々な意味で日本人の精神

文化の原点の一つのような

気もします。

このような古い伝承は、

あるいは古事記の記述に影

響を与えるエネルギーを

持っているかも知れません。

◇ですが、この道だけが古事

記の修正をできると言われ

ています。

◇(ご垂示) 古事記の間違い

を是正するのはこの道丈

(奈良市内の茶畑から「古

事記」を撰録したとされる

太安萬侶の墓誌と人骨が発

見されたことに関連したN

氏の発言に引続いて)

…古事記の間違いを是正す

るんです。それはこの道

じゃなければできませんっ

て、ね。

(昭和五十四年一月二十四日)

◇古事記についてお知りになつて

いることがあれば、

是非、編集部に原稿をお寄

せ下さい。よろしくお願

い致します。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。  
各発行月の前月15日までにお問い合わせ致します)

申込先

あたらしい道本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和7年冬号

令和7年12月8日発行 (第545号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道  
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18  
〒583-0872 TEL: 0729 (56) 7971

印刷所 キクイ印刷工芸社  
大阪府羽曳野市古市6-12-9  
〒583-0852 TEL: 0729 (56) 6881



季刊誌「あたらしい道」

---

令和七年冬号

第545号

(2025年)

---

発行／一般財団法人 あたらしい道